「誰が治めるのか？」

～私たちの心のバランスをチェックする～

エペソ１：１８～２３

みなさんは、自分がどんな存在で、今どういう考えで目的を持って生きていて、今なぜ存在しているのか分かっていますか？今回の聖書箇所は「エペソ 1:18～23」です。題名は「誰が治めるのか？」副題をつけるなら「私たちの心のバランスをチェックする」と言うメッセージです。私たちの心は誰が治めていますか？それは私たちです。多くの人たちが自分のことは自分が治めています。しかし自分で治めるというのはとても難しいことです。なぜかというと、自分の感情が訴えてくる事柄を聞かないようにしないといけないからです。私たちに感情が無ければロボットになってしまいます。だから感情は悪いものではありません。人を愛したり大切に思ったり、悪い事柄に対して憤ったり悲しんだりすることは全部感情がやっていることです。良いものなんです。しかし、この感情のおかげで人間関係を壊してしまうのです。それは“欲”と言う感情です。この“欲”も悪いものではありません。食欲・性欲などがなければ生きていけないし子孫は残りません。だから、これらをきちんとコントロールしてバランスが保たれていれば何の問題もありません。ところが、自らを自らでコントロールしようとする人間が自分を管理できない場合、この感情によってバランスが壊れれば体全体のバランスが壊れてしまうのです。神さまは、私たちを完璧に創造されました。そして何か問題があれば神さまの前にそれらを下ろしてきちんと処理できるようにされているのです。それなのに、きちんと自分を治めることができないで、私たちの問題を神さまの前に下ろすことが出来ないまま、心の奥に納めて蓋をして無かったことにしてしまいます。しかし、この問題は蓋の中で悶々と燻っているのです。蓋をしているので、私たちは燻っていることにも気づきません。やっと心の蓋を開ける気になって空けた時にはもう遅い！黒こげになってしまった…に、なりかねません。また、私たちが心を治めることが出来ないと、体はただ感情的に私たちが思うことをやってしまって、私たち自身を無免許運転の暴走車のように暴走して壊し続けてしまいます。しかし、私たちが心を治めることが出来れば安心です。だから今、私たちがきちんと自分の心が治められているのかをチェックしておかなくてはいけません。聖書に間違いを犯してしまった人がいます。イスカリオテのユダとペテロです。ユダはとても熱心な弟子でした。しかし自分の描くメシア像でイエス様を見てしまい、その理想に合致しないイエス様に苛立ちを感じて感情に負けてイエス様を銀貨で売ってしまうと言う自分の方法で行動してしまったのです。ペテロもとても熱心な弟子でした。しかしイエス様が捕らえられてしまって群衆から十字架にかけろと罵声を浴びせられていた時、ペテロも群衆からイエスの弟子では？と声をかけられます。その時ペテロは怖くなって知らないとイエス様を否定することを言ってしまいました。同じように間違いを犯してしまった２人ですが、結末は対照的です。ユダは自殺でペテロはイエス様のために命を捨てるほどの素晴らしい使徒となりました。間違いを犯してしまった後の２人の行動ですが、ユダ→マタイ 27:3～5、ペテロ→マタイ 26:74･75 に書かれているとおりです。ユダは後悔して自殺しました。一方ペテロはイエス様の言葉を思い起こして悔い改めました。そして、自分が信じていたこと、自分の使命を思い出しました。２人の違いは「思い起こす人」と「自らで感情的にどんどん行動していく人」です。私たちも、この２人と同じように、様々な問題によって、本来自分たちが持っている目的を見失わされそうになります。そして神さまを信じた最初の思いから遠ざけられてしまいます。そうすると、この弟子たちのように間違いを犯してしまいます。聖書には「間違いを犯すな」とは書いてありません。ヘブル 4:15「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。」5:2「彼は、自分自身も弱さを身にまとっているので、無知な迷っている人々を思いやることができるのです。」とあります。神さまは私たちに間違いを犯してしまう弱さがあることをご存じです。だから、私たちもこの弱さがあることを認めて「このままで良いのか？（ダメだ！）」と、神さまが今までに自分にしてくださったことを思い起こして、この弱さを克服しようとしなければいけません。そのために、考えなくてはいけないことがあります。

あなたが勝手に決断していませんか？

「自分が正しい」と思いこんでいませんか？これはマズいです。私たちは感情によって右往左往させられます。こんな私たちが正しいと言う考えは大間違いです。神さまの前に出て、自分１人で決断をしていないか吟味しなくてはいけません。そのために教会があります。感情的になっているとなかなか神さまの前に出ることが出来ません。でも愛する教会の家族は冷静に判断してくれます。そして何よりの友がイエス様です。ヨハネ 15:15「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです」とイエス様が言っているからです。イエス様は、いつも私たちが正しい道を歩めるように、友の立場になって私たちの心の中を一緒にチェックしてもしも正しい道から逸れていたら元に戻そうと働きかけてくれます。だから神さまに祈りましょう。自分が何か問題に巻き込まれた時・感情的な行動をとろうとしている時に「本当にそれでいいのか？」私たちの友である神さまに祈ってきいてください。

神さまの言葉に帰る（認める）

勝手に判断しないために、神さまの言葉を思い起こす必要があります。ただ、思い起こして終わりではなく、それを認めなければ意味がありません。認めると言うことは、私たちの感情的な心を神のことばで成敗することになります。ヘブル 4：12「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。」と書かれているとおりです。神さまの言葉に帰って、認めて、感情的に右往左往して彷徨っている私たちの心を、元の鞘に戻して管理しましょう。詩篇 32:1～7のようにダビデは祈っています。ダビデは苦しみの中にあった時「神さまに告白しよう！」と判断しました。自分で戻ったのです。そして神の言葉に帰ったのです。この箇所は悲しみの中にあったダビデが神の言葉に帰って認めて幸せになったと歌っているのです。私たちもダビデのように神さまの言葉に帰って認めて幸いなものになりましょう。

物事の意味を知る

エペソ 1:23「教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。」とあります。教会って誰ですか？私たち１人１人のことです。私たちがどんな状況にあったって、神さまは私たちを満たしてくれて、益としてくれます。ただし、そうなるには条件があって、それが「物事の意味を知る」ことです。ある状況に陥った時に、私たちは、そう言う状況にした“人”に目を向けてしまいますが、それでは何の解決にもなりません。「あいつのせいだ！」と人を指さして、人のせいにしていてはそこから何も学ぶことが出来ません。「なぜこんな状況が起こるのですか？」と神さまにきかなくてはいけません。自分のおかれた状況に留まって終わってしまっては意味がありません。この状況の中で意味を見出すことがとても大切です。私たちは“今”を見てしまいますが、神さまは“将来”を用意してくださっています。だから今の状況で物事を勝手に自分で判断して行動しては神さまの用意してくれている将来をダメにしてしまいます。だから「なぜ、こうなったのか」を状況１つ１つから知っていきましょう。

物事の意偏りを戻す。当たり前と思わない

自分の取っている行動に偏りはないですか？自分が本来の状態であるのかをチェックしてください。隣の人は関係ありません。自分の本来の姿があって自分の役割を果たすことが私たちの仕事です。だから自分の隣の人と同じ働きをするべきではありません。みんな役割が違うのです。ですから人と比較しても何の意味もありません。自分自身が本来の姿から偏っているのであれば元に戻さなければいけません。偏りを判断する方法は、２面性があるか無いかです。あちらとこちらで態度が違うかどうかで判断します。人によって言い方が変わるとか、人によって聞ける人とそうでない人があるとかないですか？そして、自分に偏りがあると、アンバランスになってしまっているので、ちょっとの衝撃で大きく崩れてしまいます。しかし偏り無く常にバランスがとれていれば、どんなに衝撃が与えられてもしっかり立つことが出来ます。影響を受けません。

だから、今日決断しましょう。悪い言葉に耳を傾けるのではなく、神さまの言葉に帰って、ユダのように自分で決断して行動しない！と。生ける神さまと私たちは共にいて、目の前にある状況は絶えず変化しています。だからいつも同じ事をしていれば良いわけありません。だから、絶えず正しい決断を神さまと共にしていかなくてはいけないのです。そのために絶えず神さまの言葉に帰りましょう。

（要約者：行司　佳世）